日本語小笠原諸島方言のコイネー（koine）の可能性
ー老年層の動詞・形容詞ー

阿部　新
（平成11年度入学）

On the Possibility of Koine in the Bonin Islands
ーVerbs and Adjectivers in a Japanese Dialect of the Older Generationー

Abe Shin

Abstract

In this article, the possibility of a koine in the dialect of the Bonin Islands is discussed by analyzing the verbs and adjectives of the older speakers of those islands. Abe (1999) has previously dealt with the verbs and adjectives spoken in the Bonin Islands. These forms originate from the Hachijojima dialect forms investigated in "The Linguistic Atlas of Japan".

The conclusions of the analysis of the data gained through interviews in Bonin (Abe 1999) are as follows: 1) Traditional Hachijojima dialect forms are changing to the forms of the common language of Japanese. 2) The changes were caused by contact with the dialects other than the Hachijojima dialect and languages other than Japanese of the Western-descent (Obeikei) islanders.

Abe (1999) discussed only the change itself and named it as "Ogasawara dialect". This article tries to find the mechanism of the occurrence of the "Ogasawara dialect" by the application of the theory of koine to the data. In order to accomplish this purpose, the evidence that supports the assertion that the dialect in the Bonin Islands is a koine will be pointed out.

Though the conclusion that dialect experiences dialect leveling (the loss of marked and/or minority variants) and that a stabilized variety has derived from the leveling should be waited for in the future analysis, the following evidence as a koine is obtained:

1) Dialect experiences the dialect mixing of any linguistic subsystems such as regional dialects, literary dialects, and sociolects. The mixing subsystems satisfy

one of following conditions. That is, they should be mutually intelligible, or they should share genetically related superseding systems such as a standard variety or literal variety.

2) Dialect contact is caused by the political, social, economic, demographic change in a community.

1．本論文の目的
2．コイネーと小笠原諸島方言
　2－1．コイネーとは
　2－2．小笠原諸島の言語的背景
　　2－2－1．小笠原諸島の言語史
　　2－2－2．八丈島方言の特徴
　2－3．コイネーと小笠原諸島方言の関連
3．データ
　3－1．インフォーマント
　3－2．調査項目
4．調査結果
　4－1．形容詞
　4－2．動詞
　4－3．調査結果のまとめ
5．分析
　5－1．言語的要件Dialect mixing
　5－2．言語的要件Dialect leveling
　5－3．社会的要件
　5－4．コイネー発展段階の検討
　5－5．コイネーの検討についてのまとめ
6．今後の課題

1．本論文の目的

本稿では小笠原諸島の老年層話者の動詞と形容詞を具体的に分析することによって、小笠原諸島方言のコイネーの可能性について論じる。

これまで、欧米系島民についてはロング（1998）、Long（1999）が詳細に分析し、現地で接触言語が発達したことが想定されている。一方日本人移民や日本語の方言形成については、阿部（1998）が歴史を概観した。津田（1988）、関口（1988）ではフィールドワークから、八丈島方言の残存があるようだとの記述があった。また、古くは平山（1941）はアクセントについて「平板アクセント」が小笠原諸島で生まれ育った者の間に存在することを記述している。これは八丈島方言のアクセントと同一の性質である。

さらに、阿部（1999）では、国立国語研究所（1964-1974）『日本言語地図』（以下、LAJという）で扱われた項目について、小笠原諸島で実施された面接調査のデータから、八丈島方言との関係が論じられた。伝統的八丈島方言形の動詞と形容詞は共通語化の方向へ変化していることが分かった。ただし、八丈島方言が小笠原諸島へ渡った後に接触したのは共通語だけではなく、欧米系島民の言語や八丈島方言以外の方言とも接触があったらしいということが分かった。共通語化によって八丈島方言が「単純化」し、「日本語小笠原方言」が誕生したと結論付けた（阿部1999：74-75）。しかし、具体的にどのようにして誕生したのか、そのメカニズムの説明には至らなかった。

そこで、この時期に小笠原諸島で発生していた日本語の一方言をコイネーとして位置付けるのが、本論文の目的となる。方法としては、分析の結果小笠原諸島方言がコイネーであると主張するに足る点を挙げる。

2．コイネーと小笠原諸島方言

では、コイネーと小笠原諸島方言はどのように関連付けられるのか、本節で概観する。

2－1．コイネーとは

まず、コイネーについてはSiegel (1985, 1987, 1993), Trudgill (1986), Mühlhäusler (1986), Holm (1988), Bubenik (1993) などで定義されている。

コイネーは元々、ヘレニズム期のギリシャ語での地域共通語（regional koine）を指していた。しかし、その後世界各地でのコイネーが研究されるにつれ、移民が異なる社会方言や地域方言を新しい環境に持ち込んだ結果発生した新しい方言（immigrant koine）をも指すようになった。さらには、言語計画によって人工的に作られた新しい変種を指すこともある（Siegel 1993: 6）。

また、異なる方言や言語の下位体系が接触した結果コイネーが発生する現象を「コイネー化（koineization）」と名付ける（Siegel 1993: 6）。コイネー化にはdialect mixing[1]，dialect leveling[2]，simplification[3]の三つのプロセスが必要（Trudgill 1986）で、コイネーが発展するにはprekoine, stabilized koine, expanded koine, nativized koineの各段階があると考えられている（Siegel 1985, 1987, 1993）。あらゆるコイネーはこれらの段階すべてを必ずしも通過しているわけではなく、prekoineからnativized koineになることも有り得るのである。

今日の社会言語学者が持っているコイネーについての定義は様々であるが、それらから考えられる共通の認識は次のようにまとめられる（Siegel 1993: 7）。1）コイネーはmixing, leveling（時にはsimplification）によって特徴付けられる変種である。2）地域方言、社会方言のような、言語的下位体系のmixing, levelingを指す。3）コイネー化の研究には社会的状況を考慮する必要がある。4）コイネーという用語は、自発的に発生した変種・意識的に計画された変種のどちらも指すことができる（Siegel 1993: 7-8）。

2－2．小笠原諸島の言語的背景

続いて、コイネーかどうかの分析対象となる小笠原諸島方言の言語的背景を概観する。

2－2－1．小笠原諸島の言語史

小笠原諸島は東京から南へ1,000キロメートルの太平洋上に位置する島々である。最初にこの島々に定住したのは欧米人・太平洋諸島の人々で、1830年のことであった。当地では多数の言語が持ち込まれた結果、英語を基にした接触言語が発生していたと考えられている（ロング1998、Long 1999）。明治初期（1875年）からは特に八丈島から多数の日本人が入植を開始し、欧米系島民の接触言語と日本人の八丈島方言との間での言語接触が続いた。この社会は第二次世界大戦終結まで続いたが、終戦後小笠原諸島は米軍の施政下におかれた。日本人入植者（旧島民）は1968年の日本への返還まで本土へ疎開させられ、欧米系島民は小笠原諸島への帰還が許され、一部が帰島した。この期間は英語の教育が行われ、英語主流社会となった。小笠原諸島が1968年に返還されてから現在まで、新たに本土から移住する者（新島民）が増えており、新たな社会が形成され始めている。言語的には、欧米系島民・旧島民の言語のほかに新島民が新たに持ち込む日本各地の方言が流入している。

2－2－2．八丈島方言の特徴

小笠原では1875年に日本人の本格的な移住が始まったが、その多くは八丈島からやってきたとされる。こういった人々の言語が小笠原で行われる日本語に影響を与えたと考えるのは自然であり、津田（1988）や清水（1994）も同様の考え方である。津田（1988）、関口（1988）、清水（1994）では八丈島方言からの影響と考えられる言語項目について調査・言及しているが、これらで検討されたのは一部の語彙と言語行動であった。

そこで今回の調査では、LAJで扱われた項目について、LAJの八丈島での回答語形をあらかじめ調べておき、それを小笠原諸島での面接で尋ねた。

八丈島方言の特徴については多くの研究がある。

平山（1968）によれば、八丈島方言のアクセントは崩壊アクセントになっており東京式アクセントと明瞭に違っている。また、奈良時代の『万葉

表１　各調査の調査状況

	LAJ	沢木（1985）	大島（1986、1987）
調査地	５地区	５地区	三根、中之郷
調査実施	1960年	1978年２月	1983～1984年
老年層生年	1881～1912年	1896～1917年	1894～1931年
中年層生年	－	1922～1943年	－
若年層生年	－	1961～1966年	1960～1968年

集』の東歌や防人歌にみられる語法と同様のものを残していた。従って方言区画上、東部方言、西部方言、九州方言に伍して「八丈島方言」をたてるべきである、と考えられている。「日本語を大きく分けると琉球方言と本土方言に分かれる。本土方言のうち、大きく西部方言と東部方言に分かれ、西部方言から九州方言が特立するように、八丈方言は東部方言から特立する。八丈方言は、日本語の中でも大きな特徴をもつ方言といってよい。」（中本・高橋・名嘉真1986）

文法に関しては、用言[4]の連体形と終止形が特徴的である（今回は連体形は調査していないので、以下の議論では省略する）。動詞の終止形は「書く」の場合、kak-o-waとなる（“kak-”は語幹、“o”は活用語尾、“-wa”は終助詞「よ」に相当）。形容詞の終止形は「赤い」の場合、akak-jaとなる（“akak-”は語幹、“-ja”は活用語尾）（飯豊1959、大島編1987）。また、動詞には接頭辞がつくことが比較的多い。例：オッツカム（つかむ）、オッパシル（走る）。（中本・高橋・名嘉真1986）

また、八丈島方言の変容について、LAJ以降の変容を扱った研究は沢木（1985）、大島編（1986、1987）がある。各調査（LAJ、沢木1985、大島編1986、1987）の調査状況を表１に掲げた。これら三調査のインフォーマントは世代がほぼ同一である。これらは約20年の間隔で調査されているので、比較によって約20年間の老年層話者の実時間の変化がわかる。また、老年層と若年層の比較からは見かけの時間上の変化がわかることになる。

沢木氏、大島氏の調査・報告から、八丈島方言は老年層と若年層の間での「見かけの時間上の変化」として次のことが分かった。文法項目については、共通語形と方言形との間にいくつもの中間的混交形が現れ、若年層が特によく用いる。純粋な方言形態単独で存在することはなく、地域差も小さくなっている。

２－３．コイネーと小笠原諸島方言の関連

以上のような八丈島方言が小笠原諸島の方言に最も強く影響を与え、また同時に共通語からの影響やその他の方言も影響を与えており、それがコイネーの発生へと繋がったと考えられるのである。

３．データ

1997年８月31日から９月10日まで筆者が小笠原村父島に滞在した際に行った面接調査で得られたデータを使用する。

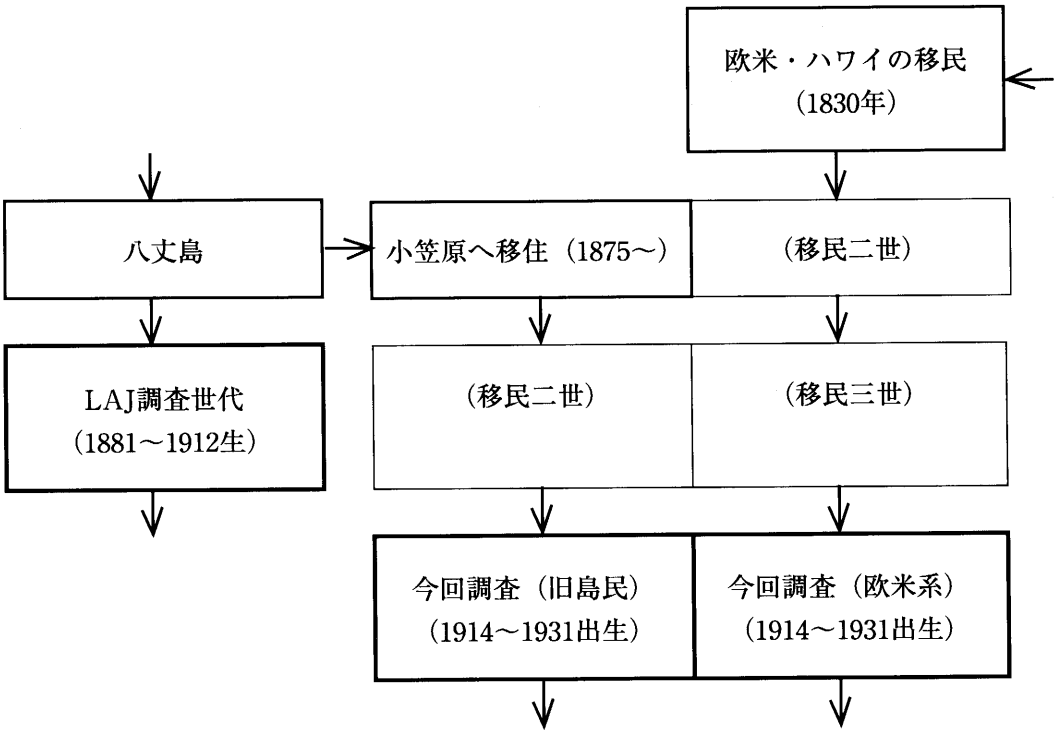
３－１．インフォーマント

LAJの八丈島でのインフォーマントと今回筆者が調査した小笠原諸島でのインフォーマント（父島の欧米系島民、旧島民各一名）を比較する。前

表２　調査条件の比較

	LAJ	今回の調査
話者生年	1881～1912年	1914～1931年
調査実施	1960年	1997年９月
生え抜きか否か	生え抜き	本土へ疎開等あり

図１　八丈島におけるLAJのインフォーマントと今回のインフォーマントの関係



者の数世代前と後者の数世代前は、共に八丈島で生活をしていたと考えられる。

２つの調査条件の比較（表２）において注意すべき点は、LAJのインフォーマントが生え抜きで”あるのに対し、今回調査したインフォーマントはそうではない点である。終戦後長い間東京や八丈島へ疎開していたり、海外在住経験があるインフォーマントである。

生え抜きの話者を得られないことは方言調査において決定的な瑕疵となり得るが、小笠原諸島においては30歳以上の者で生え抜きの話者を得ることは困難である。第二次世界大戦中には全島民の疎開があり、戦後も23年間にわたりほとんどの元島民は帰島を許されなかったからである。生え抜きの話者が得られるのは30歳以下の者に限られる。小笠原諸島が日本へ返還されてから1998年で30年を迎えたばかりだからである。

今回のインフォーマントは生え抜きではないが、言語形成期は小笠原諸島で過ごしている。従って、小笠原諸島での言葉がインフォーマントの言葉の基礎となってはいるだろうが、その後の疎開等による影響も大きく作用しているであろうことは十分考慮すべきことであろう。

また、今回の調査におけるインフォーマントは、LAJのインフォーマントよりも一世代若い（図１）。今回調査の旧島民インフォーマントはおよそ移民二世から三世である。したがって、LAJのインフォーマントは移民一世から二世とほぼ同世代である。この世代差についても本来なら同年代の話者で揃えるべきであるが、小笠原諸島では困難な状況である。LAJ調査当時と同年代の話者は現在95歳以上の高齢であるが、小笠原村における90歳以上の住民は小笠原村村民課住民係の資料によれば1997年８月１日現在で３名である。ちなみに、今回調査の欧米系島民インフォーマントはおよそ移民四世である。彼らは入植の時期が日本人移民よりも早いので、「世代」としては一つずれることになる。

以上から、今回の比較では２つの点に注意が必要である。①LAJのインフォーマントは生え抜きであるが、今回の調査のインフォーマントは第二次世界大戦前後に長期間の在外歴がある。②今回

表３　今回調査のうちLAJでの調査項目数

	井上（1997）	大橋（1992）	合計
６．感覚	８[5]	２	10
７．存在・動き	６	２[6]	８
合計	14	４	18

のインフォーマントはLAJのインフォーマントよりも一世代若い。

３－２．調査項目

分析する項目は井上（1997）から準備した14項目と大橋（1992）から準備した４項目である（表３）。すべてLAJでも調査された項目である。井上（1997）での分類「6. 感覚」は第１巻、「7. 存在・動き」は第２巻にそれぞれ収められている。

これらのうち、形容詞は10項目、動詞は８項目である。それらについて大橋（1992）、徳川編（1979）、小学館辞典編集部編（1991）から、八丈島での語形を特定できるものは特定して、八丈島方言の影響や残存を見られるようにし、その語形を使うか、聞いたことがあるか、聞かないかを尋ねた。適宜使う語形を回答してもらった。

４．調査結果

今回の調査では、インフォーマントから次の５種類の回答を得た。

①「八丈島方言語形を聞かない」
②共通語にも八丈島方言にもない語形
③共通語化した語形（共通語と八丈島方言の語形が異なり、小笠原で共通語形）
④八丈島方言語形（共通語と八丈島方言の語形が同じ）
⑤八丈島方言語形（共通語と八丈島方言の語形が異なる）

方言語彙には衰退と残存のための規則性、「衰退規則」と「残存規則」がある（佐藤1996：79）。語彙はまず「衰退①」と「残存」のどちらかに向かう。「衰退」には「消失」と「換言」がある。「換言」はさらに「非共通語非八丈島方言語形②」と「共通語化③」の２つが考えられる。「残存」には「共通語形の残存④」と「方言語形の残存⑤」の２つがある。その結果、「非共通語非八丈島方言語形」「共通語形」「方言語形」の３種類が得られる。小笠原諸島における上記①～⑤の回答を佐藤（1996）を発展させて分類すると図２のようになる。

本稿では以下、文法項目のうち非共通語非八丈島方言語形と八丈島方言語形を分析していく。ここでの文法項目とは、学校文法でいうところの「形容詞、動詞の終止形」である。

４－１．形容詞

形容詞は八丈島では10項目すべてが方言形で、特徴的な活用語尾が用いられていた。ところが現在の小笠原ではそれが10項目すべてで失われていた。つまり伝統的八丈島方言語形は小笠原の形容詞には現れなかった。

共通語と同語形が現れたのは９項目あった（表

図２　方言の衰退と残存

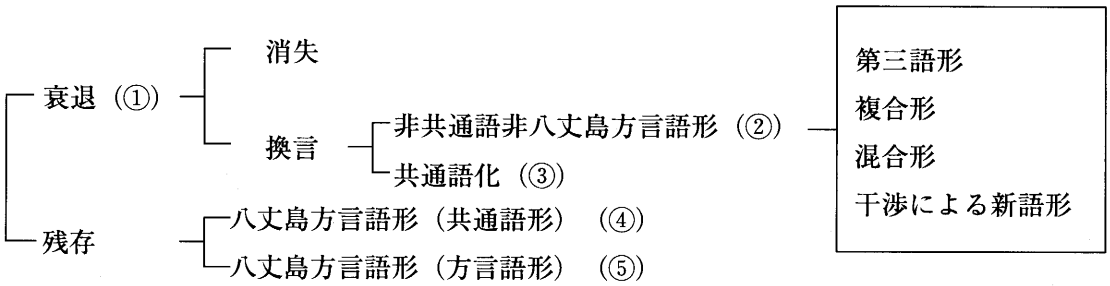


表４　形容詞全10項目

	八丈島		小笠原諸島	
	方言語形	一部共通語化語形	非共通語形	共通語形
「大きい」	ボーキャ	―	オッキー	オーキー
「小さい」	ネッコキャ	―	チッチャイ ネッコイ	チーサイ
「鹹い」	カラキャ	ショッパキャ	ショッパイ	シオカライ
「辛い」	パレロワ（動詞）	カラキャ	アツイ	カライ
「恐ろしい」	オッカナキャ コワキャ	オッカナイ	オッカナイ コワイ	―
「焦げ臭い」	シキツキクサイ	―	―	コゲクサイ
「眩しい」	マボローシキャ	マブーシカ	―	マブシー
「甘い」	アマキャ		―	アマイ
「(塩味が) 薄い」	アマキャ	―	―	ウスイ
「酸っぱい」	カラキャ	スッパキャ	―	スッパイ

４最右欄)。これは二種類に分けられる。一つは語幹がそのままで共通語の活用語尾だけを採り入れたもの（「まぶしい（眩しい)」「からい（辛い)」「すっぱい（酸っぱい)」「あまい（甘い)」「しおからい（鹹い)」）である。もう一つは八丈島方言語形を捨てて共通語形を取り入れたもの(「しおからい（鹹い)」「うすい（薄い)」「大きい」「小さい」「こげくさい（焦げ臭い)」）である。

共通語とも八丈島方言とも異なる語形が現れたのは、「おおきい（大きい)」「ちいさい（小さい)」「しおからい（鹹い)」「からい（辛い)」「おそろしい（恐ろしい)」の５項目である（表４網掛部)。表４での八丈島の、「一部共通語化語形」とは、LAJにおいて八丈島で現れた語形であるが、語形の形式が八丈島方言の伝統的形式ではなく、共通語と接触したことによって発生したと考えられる語形のことである。

「おおきい（大きい)」における「オッキー」、「ちいさい（小さい)」における「チッチャイ」は俗語的表現である。

「しおからい（鹹い)」では、「ショッパキャ」という語形から「ショッパイ」が現れ、活用語尾が単純化し「口語的な共通語形」（井上1995）になった。八丈島では「カラキャ」が多かったが、小笠原ではこの活用語尾が共通語化した「カライ」は見られず、「ショッパイ」が多く見られる。これはLAJでは東日本で広くつかわれていた語形であった。

「からい（辛い)」では、欧米系島民には「アツイ」という語形が見られた。これは英語の"hot"を誤って転移させた例であろう。

「おそろしい（恐ろしい)」では、「オッカナイ」と「コワイ」の二つが見られた。八丈島では「オッカナキャ」「コワキャ」の方言形が見られていたが、以前から「オッカナイ」という語形も見られた。井上（1995）では、「オソロシイは標準語、コワイは共通語、オッカナイは（東日本の）共通語の俗っぽい表現」であると分類する。すなわち、標準語化はしていないが、共通語化はある程度昔からしていたと言える。

八丈島と同様の変化が見られたのは、「ちいさい(小さい)」における「ネッコキャ」に対して、「ネッコイ」が現れたことである。沢木（1985)、大島編（1987）においても、「おおきい（大きい)」において方言語形「ボーキャ」の語幹に共通語式の語尾変化をさせた語形「ボーイ」が記述されている。同様の変化である。

以上、小笠原諸島の日本語における形容詞の変化を概観した。八丈島でのLAJの語形には八丈島方言と共通語との中間方言的語形が見られ、活用

表５　動詞全８項目

	八丈島		小笠原諸島	
	方言語形	一部共通語化語形	非共通語形	共通語形
「煮る」	ニロワ		タク	ニル
「落ちる」	ブッコテロワ オテロワ	ブッコテル オチル	ブッコチル オッコチル	―
「遣る」	ケロワ	ヤロワ	―	ヤル
「びっくりする」	ブッチョベローワ	ビックリショワ	―	ビックリスル
「凍る」	―			
「坐る」	ヒジャマツコワ	ヒザマヅク		―
「捨てる」	ブッチャロワ類	ブッチャル		―
「数える」	カンジョーショワ類	カンジョースル		―

語尾も方言形と共通語形の両方が見られていた。しかし、小笠原においては活用語尾は共通語のものだけになっている。

一方語幹は八丈島方言の語形や東日本方言からのもの、英語を転移させたものがあった。語幹部分は多くの中間的形式が使われ、混交や変種が多く見られる状態であるといえよう。

４－２．動詞

動詞は八丈島では８項目のうち７項目に方言形が現れた。(方言形が現れなかった項目は「こおる(手拭が凍る)」で、無回答だった)。八丈島では特徴的な活用語尾（＋終助詞）が用いられていたが、現在の小笠原諸島では7項目すべてでそれが失われていた（表５)。

共通語と同語形が現れたのは、「煮る」「遣る」「びっくりする」の３項目であった（表５最右欄)。

共通語とも八丈島方言とも異なる語形は２項目(「にる（煮る)」「＜雷が＞おちる（落ちる)」）だった。「にる（煮る)」に対して「タク」、「＜雷が＞おちる（落ちる)」に対して「ブッコチル」「オッコチル」が聞かれた。

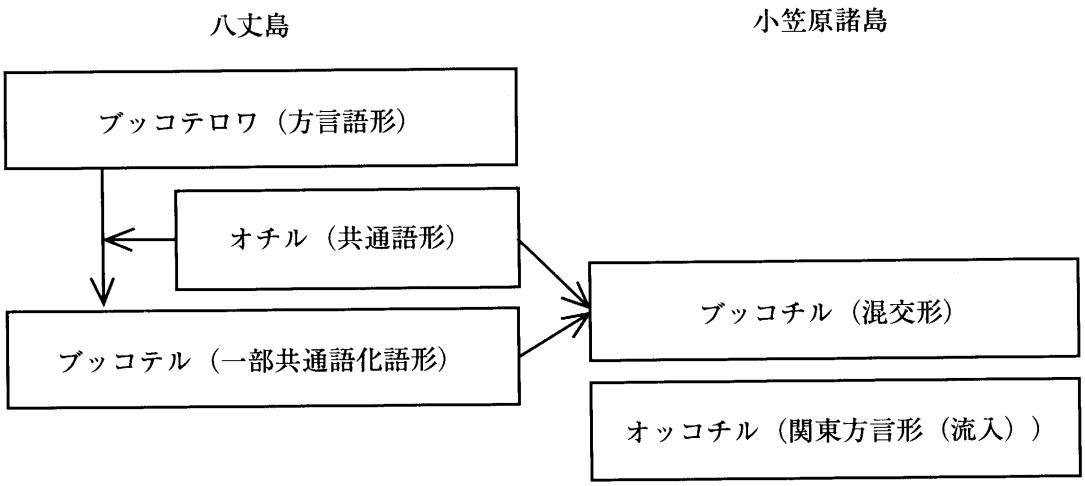
「タク」は欧米系島民から聞かれた。LAJでは、全国で「にる（煮る)」の代表語形は「ニル」「タク」「ワカス」の３種であり、その中でも「タク」は近畿、中国、四国、九州と北陸、岩手の一部に見られる（小学館辞典編集部編1991：156)。東国方言の語形ではないので、八丈島以外の土地から持ち込まれたという可能性が考えられる。八丈島方言以外の方言の影響もゼロとは言えない。

「＜雷が＞おちる（落ちる)」では、「ブッコテロワ」「オテロワ」「ブッコテル」「オチル」が八丈島で回答された。これらのうち、「ブッ」は動詞につく接頭辞である。/oter-/という語幹は、九州にのみ見られる語形（小学館辞典編集部編1981：22)で、下二段活用の残存した語形「オツル」と関連するものである。一方「オチル」は共通語から流入したものであろう。小笠原諸島では「ブッコチル」「オッコチル」の２種が見られた。「ブッコチル」は「ブッコテル」と「オチル」から生まれたと考えられる。「オッコチル」はLAJにおいて関東地方に分布する。小笠原諸島で見られた「オッコチル」も関東地方からのものだろう。(図３)

一方、八丈島方言の語形が残存したのは「すわる（坐る)」「すてる（捨てる)」「かぞえる（数える)」であった（表５)。いずれも八丈島の５地点中４地点では、語幹が少しずつ異なっているが、特徴的な活用語尾を用いていたものである。ここでの「残存している語形」とは、５地点中１地点でのみで現れた「八丈島方言の語幹＋共通語の活用語尾」が小笠原諸島でも現れたということに過ぎない。

以上、小笠原諸島の日本語における動詞の変化を概観した。八丈島でのLAJの語形には八丈島方言と共通語との中間方言的語形が見られ、活用語尾も方言形と共通語形の両方が見られていた。し

図３　「<雷が>おちる（落ちる）」



かし、小笠原においては形容詞と同様に活用語尾は共通語のものだけになっている。

語幹も形容詞と同様に、八丈島方言の語形や東日本方言からのもの、八丈島方言以外の方言（奈良、四国、佐賀）のものといった、さまざまな変種を取りこんでいる。

４－３．調査結果のまとめ

小笠原諸島の老年層の動詞・形容詞について、非共通語非八丈島方言語形の例と八丈島方言語形の残存の例を見てきた。

上からの変化としては、八丈島方言の文法項目（形容詞、動詞の終止形）の特殊な活用語尾が小笠原諸島では捨てられて、共通語の活用語尾が採用された。

また下からの変化としては、共通語以外からの影響も受けている。日本語以外の言語（ボニンクレオール英語または英語）や八丈島方言以外の方言からのものである。

５．分析

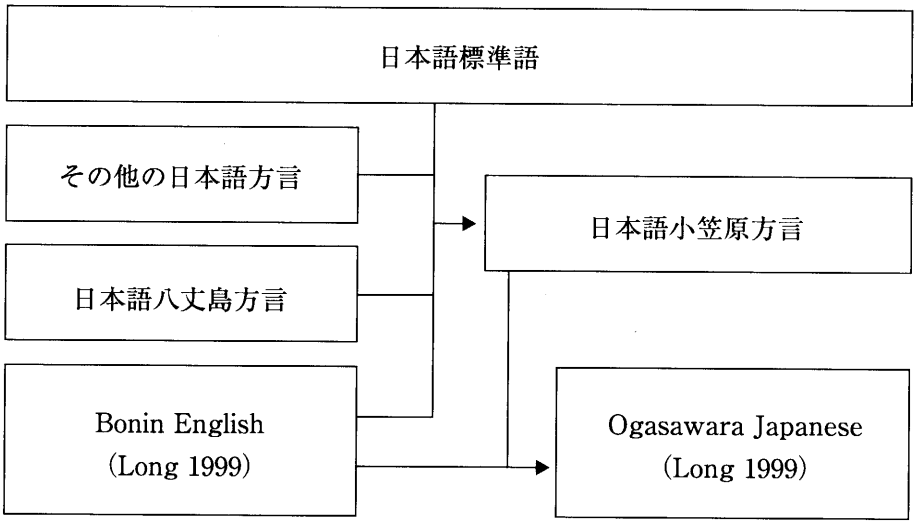
八丈島方言の動詞・形容詞について小笠原諸島での回答を比較したところ、上からの変化として特殊な活用語尾が共通語に近づき衰退していた。また、下からの変化として日本語以外の言語や共通語や八丈島方言以外の方言からの混交が見られた。以下主にSiegel（1985他），Trudgill（1986）の説を詳しく検討して、小笠原諸島での現象がコイネー・コイネー化の要件を持つか見ていく。

５－１．言語的要件　Dialect mixing

コイネー・コイネー化についての第一の要件として、まずTrudgill（1986）はdialect mixtureを挙げ（p.126）、全く新しい中間方言の誕生であるとした。その混交は「地域方言、文語、社会方言などの言語的下位体系の混交」“the mixing of any linguistic subsystems such as regional dialects, literary dialects, and sociolects （Siegel 1985:363）”である。この混交がない単なる共通語やlingua francaではコイネーとは言えない。

まずこの要件について、小笠原諸島において言語的下位体系の混交があったのかどうか。小笠原諸島では八丈島方言が主流であったところに標準日本語による学校教育がもたらされた。この教育によって方言が共通語の影響を受けた。同時にその他の日本語方言や欧米系島民の言語（Bonin English（Long 1999））からも若干の影響を受けた（図４）。コイネー化は言語的下位体系間での接触の結果起きる。「下位体系」とは（1）互いに理解可能な体系、または（2）標準語や文語のように、発生的に関係した上位の言語体系を共有しているか、二つの条件のうち一つを満たしていればよい。「下位体系」とは必ずしも方言のことを指しているのではなく、互いに理解できない方言である場合

図４　戦前までの小笠原諸島における言語状況



もあるし、互いに理解可能な言語である場合もある。この点で、小笠原諸島で接触した体系は互いに理解可能であっただろうし、発生的に関係した上位言語体系を持っている。両方の条件を満たしているのである。

この結果、形容詞や動詞は八丈島方言の数多い活用形から共通語の活用へと変化したり、共通語との中間方言的形式も見られた（上からの変化）。また、共通語以外の方言すなわち八丈島方言の要素や八丈島方言以外の要素がみられた（下からの変化）。

以上から、小笠原諸島ではコイネー・コイネー化の第一の要件、dailect mixingは満たしている。

５－２．言語的要件　Dialect leveling

Trudgill（1986:98）によれば、コイネー化の第二の要件としてのdialect levelingは「有標の」または少数派の変異形が失われることである。その結果、コイネーは安定していく。この安定性がコイネーの第二の要件となる。"[A] koine has stabilized enough to be considered at least informally standardized.（Siegel 1985:363）"

Long（1999）では欧米系島民の言語が日本人との接触した結果、Ogasawara Japaneseという変種が生まれたとしている。この変種は「いくらか単純化した八丈島方言に基づいた日本語の影響を受けている」"This language variety (which is still in use among *obeikei* islanders today) consists basically of a Japanese grammar based on the Hachijô dialect of Japanese (but somewhat simplified compared to mainland varieties), …."（Long 1999）とされ、この日本語が今回論じているコイネー（図４中「日本語小笠原方言」）であると考えられる。

小笠原諸島のコイネーの安定性について、この日本語の変種が安定した地域共通語、lingua francaがあったかどうか検討してみよう。

この変種が安定していたという考え方がまずできる。インフォーマントの一人である欧米系島民は「八丈出身の者には八丈の言葉でしゃべる」と話していた。このことから欧米系島民は日本語小笠原方言をも使うことができ、Ogasawara Japaneseとのbidialectalであると考えられるだろう（図４参照）。したがってコイネーは日本人移民である旧島民だけが使うのではなく、欧米系島民も使うことができる地域共通語的性質のものであったと推測できよう。

しかし、逆に安定していなかったとも考えられる。欧米系島民がbidialectalであること、教育媒体である共通語も存在していることなどの原因によって、不安定な状態に置かれていたという考え方もできる。有標の形式が無くなっていき、安定的な形式が生き残っていくlevelingの結果、地域共通

表６　Developmental continua of pidgins and koines (Siegel 1985:374)

Process	Stage of development	
	Pidginzation	*Koineization*
Initial contact	prepidgin (jargon)	prekoine
Stabilization	stable pidgin	stable koine
Expansion	expanded pidgin	expanded koine
Nativization	creole	nativized koine

語的性格が現れてくるものと思われるが、欧米系島民がbidialectalだったとすると、「安定的な形式」が残るという状況ではなく、多くの変異形が並存した不安定な状態であり、levelingは起こしていなかったとも考えられる。

以上から、小笠原諸島では、コイネー・コイネー化の第二の要件、dialect levelingは満たしていたとは言いきれないと推測できる。

５－３．社会的要件

社会的要件としては、接触の結果「異なる言語下位体系話者同士の交流が増えていったり、言語的差異を保とうとする傾向が薄れていったり」ということを起こすような政治的、社会的、経済的、人口的変化が必要であり、これがコイネー化を起こすのである（Siegel 1985:366）。このようなコイネー化を導くような変化が起こるのは「移住」が典型的な例として挙げられる。この点について、小笠原諸島はコイネーの発生の土壌として当てはまる。日本人が八丈島から大挙して移住してきたことについては２－１．で述べた。

以上から、小笠原諸島ではコイネー化の社会的要件は満たしているということが分かった。

５－４．コイネー発展段階の検討

最後に、小笠原諸島でのコイネーがコイネー発展段階のどこにあったのかを検討する。コイネーはピジンの発展と並行的な段階を経て発展していくと考えられていることは５－１．でも述べた（Siegel 1985, 1987）（表６）。コイネー発展の各段階を検討し、小笠原諸島でのコイネー発展を特徴づける。

最初の段階は不安定なprekoineで、接触している下位体系の様々な形式が使われている。いくつかの混交が起こっているが、受け入れられるような形式は発生していない。次のstable koineでは語彙的、音韻的、形態的な規範ができつつあり、新たな折衷的方言が生まれる。しかし文法的にはまだ複雑さが少ない。次のexpanded koineではコミュニケーション以外の使用領域へ拡張される。文章語や標準的変種となり、形態的複雑さやスタイル差が生まれる。最後にnativized koineはある一群の話者の第一言語となる（Siegel 1987:201）。

今回の分析資料はどの段階にあるコイネーと言えるだろうか。dialect mixingを起こしているので、まずprekoineの段階はすでに経験していたと言える。八丈島方言や共通語だけでなく、さまざまな方言からの形式が見られていたからである。さらに折衷的方言形と考えられるような中間的方言形も見られた。ここから、stable koineの段階にも移行しつつあったと考えられる。しかしlevelingを起こしていなかったので、lingua francaのような地域共通語的性格は持っていなかった。そこから、完全なstable koineにまでは到達していなかったであろうと推測する。

ただ、最後のnativized koineには到達していたと言えるだろう。図１にあるように今回のインフォーマントは、最初の接触を経験してからすでに三世代目である。北海道での共通語化の研究（小野1978、1993など）から分かったことであるが、移民三世では北海道地域共通語（北海道内陸方言）を形成するに至っている。このことから推測すれば、すでに今回のインフォーマント達もなんらかの共通的体系を発達させていて、それが次の世代

の第一方言となっていたと考えられるだろう。

したがって、小笠原諸島ではexpanded koineの段階を飛び越えて、最終的にはnativized koineに到達していたと考えられる。ただし今回のインフォーマントは不完全なstable koineかそれ以前の段階のものであろう。

5－5．コイネーの検討についてのまとめ

小笠原諸島老年層のインフォーマントのデータがコイネーの要件とコイネー化の要件を満たしているかを検証した。コイネーの言語的要件として、①言語の下位体系間の接触によるdialect mixingは満たしていた。しかし②levelingによるlingua francaのような安定した体系であるという要件は満たしているとは言いきれない。コイネー化の社会的要件として③日本人移民の移住がコイネー化を引き起こす大きな原因であったことを確認した。

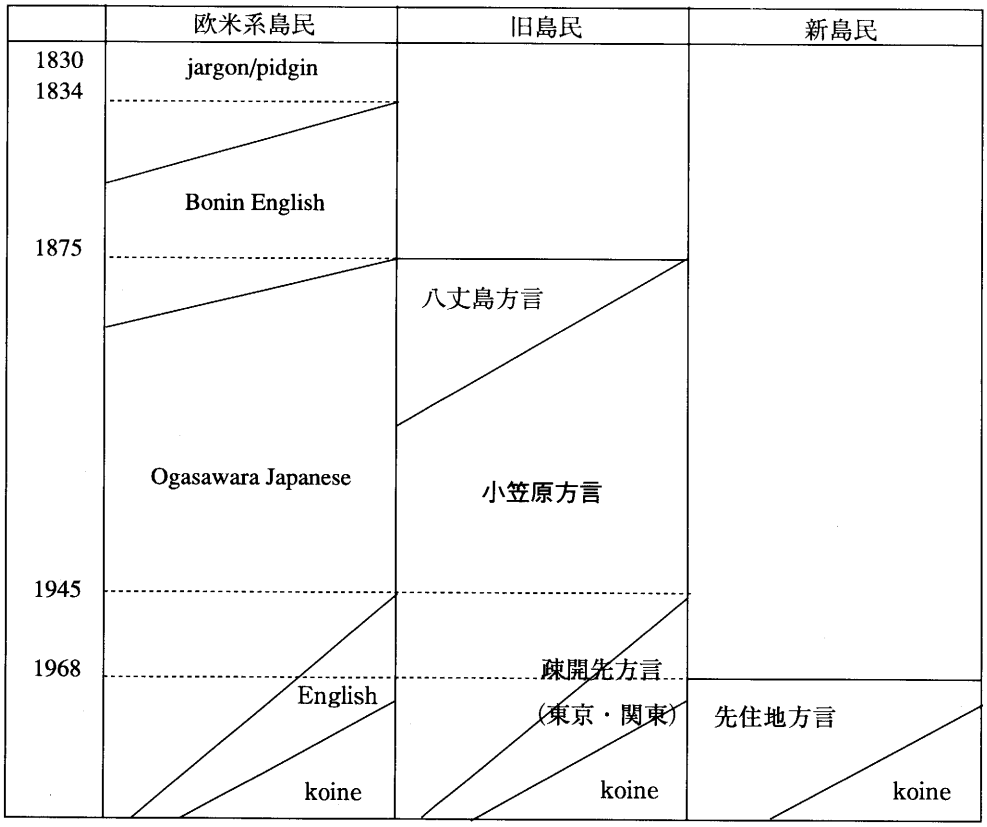
コイネー発達の過程は、prekoine, stable koineの段階からnativized koineへ発展したことを推測した。

6．今後の課題

今後の課題として、今回分析したコイネーについては、levelingの実証が必要である。今回扱った変種は、図5に示した小笠原諸島の言語接触の流れの中で見ると「旧島民の小笠原方言」にあたる。この変種の話者はすでに高齢となっているため、早急にデータを集めてlevelingを起こしていたかどうかの分析を進める必要がある。今回は音韻(アクセント）については全く触れることができなかった。録音資料を分析して様々な言語レベルでのコイネーを検証しなくてはいけない。

また、今回分析した変種以外の変種では、re-koineizationが問題となる。コイネーが元々接触していた方言と接触しつづけたり、別の方言とさらに接触する現象を“rekoineization”と名付けている（Siegel 1987:202)。図5に示したように、終戦後は旧島民コイネー話者は東京などに疎開して疎

図5　小笠原諸島の言語接触の流れ



開先の方言と接触しており、また欧米系島民コイネー話者は米軍施政下の英語教育と接触している。このように複雑な接触はrekoineization自体や、コイネー化を言語接触とどう区別するかという理論的な問題に繋がる。

さらに、図５中の“koine”は新島民によって形成されつつある変種である。現在の小笠原では新島民の人口が最も多く、この新たに発生した接触方言は彼らによって小笠原方言として根付いて行くであろう。しかしこの変種についても研究はほとんどなされておらず、今後の課題となる。

問題点は数多く残されているとはいえ、小笠原諸島の方言がコイネーである可能性を指摘したことによって日本語の方言に対してコイネーについての理論を適用することができ、今後の研究の方向を示すことができた。今後も老年層のデータを集め、コイネーについての研究を進めて行く必要がある。

(本論文は1998年度に東京外国語大学大学院に提出した修士学位論文の一部を元に、加筆・修正したものである。)

謝辞

本論文をまとめるにあたり、小笠原諸島の現地のインフォーマントの方々、関係者の方々にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

注

1）occurrence of “whole new interdialectal *varieties* (or *interdialects*), including new intermediate dialects” (Trudgill 1986:83)

2）“the loss of marked and/or minority variants” (Trudgill 1986:125)

3）“an increase in morphophonemic regularity” and “the loss of inflections and an increase in invariable word forms” (Trudgill 1986:103)

4）活用体系全体については飯豊（1959)、中本（1984）に詳しい。

5）形容詞のみを分析する必要上、「いくら」を除外する。

6）調査時に「自然」の項目に入れていた「＜雷が＞おちる（落ちる)」は動詞部分を聞いたものなので、この分析においては「存在・動き」の項目とした。

7）コイネー化の理論が異なる言語体系間の接触の結果にまで拡大解釈されることがある。しかし、これらは借用(borrowing）や収斂（convergence）という用語で説明されるべきで、区別すべきである（Siegel 1987:188)。

参考文献

阿部　新（1998)「小笠原における日本語の方言形成」『日本語研究センター報告』６号（特集：『小笠原諸島の言語文化』）大阪樟蔭女子大学日本語研究センター：149-160

_____（1999)「日本語方言における言語接触－小笠原諸島をフィールドとして－」東京外国語大学大学院博士前期課程修士学位論文

飯豊毅一（1959)「八丈島の語法」『国立国語研究所論集』１号

井上史雄（1995)「標準語形と共通語形の中学生での全国分布」井上史雄編『日本語教育における社会言語学的基盤』科学研究費報告書：77-88.

_____（1997)『社会方言学資料図集－全国中学校言語使用調査（1994-1996)』東京外国語大学

井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編（1995)『日本列島方言叢書⑦関東方言考③東京都』ゆまに書房

大島一郎編（1986)『南部伊豆諸島方言の記述的・社会言語学的研究』昭和60年度科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書

_____（1987)『八丈島方言における言語変化－共通語化の側面を中心として－』東京都立大学人文学部国語学研究室

大橋勝男（1992)『関東地方域の方言についての方言地理学的研究　第4巻』桜楓社

小野米一（1978)「移住と言語変容」『岩波講座日本語　別巻　日本語研究の周辺』岩波書店

_____（1993)『北海道方言の研究』学芸図書

国立国語研究所（1964－1974)『日本言語地図第１集～第６集』大蔵省印刷局

佐藤和之（1996)『方言主流社会－共生としての方言と共通語－』おうふう

沢木幹栄（1985）「地域差と世代差と場面差－八丈島における調査から－」国立国語研究所『方言の諸相『日本言語地図』検証調査報告』三省堂
清水理恵子（1994）「小笠原欧米系島民言語生活研究」共立女子大学文芸学部卒業論文
小学館辞典編集部編（1991）『方言の読本』小学館
関口やよい（1988）「小笠原諸島住民の言語使用に関するパイロットスタディー」『Sophia Linguistica』26
津田　葵（1988）「小笠原における言語変化と文化変容」『Sophia Linguistica』23/24
徳川宗賢編（1979）『日本の方言地図』中公新書
中本正智（1984）「八丈島方言の文法」『国文学－解釈と鑑賞－』49巻１号
中本正智・高橋顕志・名嘉真三成（1986）「八丈島」東京都教育委員会編『東京都言語地図』東京都教育委員会
平山輝男（1941）「豆南諸島のアクセントとその境界線」『音声学協会会報』67・68号（井上他編（1995）に再録）
_____（1968）『日本の方言』講談社現代新書
ロング、ダニエル（1998）「小笠原諸島における言語接触の歴史」『日本語研究センター報告』６号（特集：『小笠原諸島の言語文化』）大阪樟蔭女子大学日本語研究センター：87-127
Bubenik, Vit. (1993). "Dialect contact and koineization: The case of Hellenistic Greek". *International Journal of the Sociology of Language*, 99: 9-24.
Holm, John. (1988). *Pidgins and Creoles. Vol. 1, Theory and structure*. Cambridge University Press.
Long, Daniel. (1999). "Evidence of an English Contact Language in the 19th Century Bonin (Ogasawara) Islands". *English World-Wide* 20-2: 251-286. Amsterdam: John Benjamins.
Mühlhäusler, Peter. (1986). *Pidgin and Creole Linguistics*. Blackwell.
Siegel, Jeff. (1985). "Koines and koineization". *Language in Society,* 14: 357-378.
_____ (1987). *Language contact in a plantation environment: A sociolinguistic history of Fiji*. Cambridge: Cambridge University Press.
_____ (1993). "Introduction: Controversies in the study of koines and koineization". *International Journal of the Sociology of Language*, 99: 5-8.
Trudgill, Peter. (1986). *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.